

ななかま

プリンストン日本語学校新聞



平成24年度 No.32号

平成24年1月13日

文責 長尾重範

雁千羽 雪を背負いて 待つあした
役終えて 無残モミの木 ゴミとなり

書き初め 高等部入学説明会

行事予定表

- | | |
|-------|------------------------------|
| 1月20日 | 書き初め(幼稚部)書き初め展示会 |
| 1月27日 | JASL Fall 終了(2月3日 Spring 開始) |
| 2月10日 | 新小1入学者合同説明会 |
| 2月17日 | 古本セール |
| 2月24日 | 幼稚部説明会 |

風邪流行の季節に

手洗い・うがいを励行しましょう！

人が多く集まるところで咳をしている人を見かけるようになりました。インフルエンザの流行も懸念されます。何よりも未然予防が大事なので、原因を排除するために日頃から十分の注意をしましょう。

賊が侵入して来たら

ライダー大学のセキュリティがパトロールをしている構内に火器等をもって侵入してくることは難しいと思われませんが、それが起こり得ないとは言いきれません。そこで本校の安全についてみてみます。

安全対策のために、校舎の出入りに鍵をかけて正面入り口を警備するという学校もありますが、メモリアルホール校舎には研究室等もあって日常的に校舎を封鎖することはできません。そして、各教室も内側からは鍵がかかりません。ですから構造的には、とっさの場合に入ろうとする賊を阻止できません。

銃を持った人物が侵入した場合、生徒が廊下や屋外にいれば直ちに教室や構造物の陰に避難しなければなりません。賊が教室に侵入し生徒を害しようとする場合には、生徒は机椅子の陰に隠れるしか方法がありません。もし、教室外からの発砲の可能性のある時には、窓やドアから標的にされないために、相手の視界に入らない所に隠れなければなりません。ブラインドを下ろしたり電気を消したりして静かに隠れていることも大事でしょう。

色々な場面を想定しながら、安全に行動できるように日頃から訓練しておきたいと思います。

「私が手にした宝物」 高3 竹内友子

このもやもやする気持ちは一体何なのだろう。この苦痛の日々から私はどうしたら抜けられるのだろう。私は毎日過ごしていく時間の中で、自問自答に迷い続けた。

私はこれまでアメリカで在住してきた五年間、一度も弱音を吐いたことはなかった。初めてアメリカの学校に行った時、英語で「こんにちは」しか話せなかった時でさえ、一度も学校を休もうと思ったこともなかったし、泣いたことさえなかった。正直な事を言うと、つらい日々も本当はあった。言葉が思い通りに相手へ伝わらないのは日常茶飯事。だがそれに加えて、周りの人との生活習慣や、思考回路が全く違うなど、コミュニケーションのせいだけではない異文化の問題も沢山あった。けれど私には姉と兄が居て、その二人のほうが私より、よっぽど大変な学校生活を送っていたことを知っていた私は、これ以上親を心配させてはいけないと思い、学校の事を聞かれると決まって笑顔で「毎日たのしいよ」と言っていた。自分の弱みをさらけ出したら、皆悲しんでしまうのではないかと恐かったのだ。自分にとって大切な家族というのもあり、「つらい時こそ笑わなければならない」「私が家族を明るくしなければならぬ」と心に言い聞かせていた。だがその都度、少しずつ自身を追い込んでしまっている私が出た。

そんな日々が続く、姉が大学へと入学、兄が転校と同時に、私は現在通っている新しい学校へと二年前行くことになった。家から十五分しか離れていない学校であったが、英語力を高めようと、寮生活をすることに私は決めた。「自分で決めた事は実行する」、「どんな事にも挑戦したい」という好奇心は、私の最大の強みである。初めての寮生活と言う事でももちろん緊張したが、もともと社交的な性格のせいかな、すぐに友達もでき、寮の暮らしにもすんなりと慣れていった。一ヶ月に二、三回ほど家に帰っていたので、思っていたほどストレスは溜まらなかった。きっと心の中でも、「何かあればいつでも家族に会える」と分かっていたから気が楽だったというのもあったのだろう。(裏面へ続く)

ななかま

(表面から続く)

それから一年が経ち、母と兄は日本へと帰国し、姉は引き続き大学での寮生活。父は出張が多くなり、滅多に家に居ることがなくなった。家族が次第に、異なる場所で暮らすことになったのだ。それがどれだけ大変な事かも知らず、私は新しい学年へと進級し新たな一年を送り始めた。最初の三週間ほどは順調に進んだ。しかし、四週間目に入るとさすがに疲れてきて、「少し休日の間だけ家に帰ろう」と思った。だが考えてみると、父が出張に行っている間は家に誰もいないのだ。その時「家に帰りたいけど帰れない」「家族に会いたいけど会えない」とはこういう事なんだなあと痛感し、私は生まれて初めてホームシックになった。だが、友達にも家族にも自分の弱みを見せる事を拒む私は、寮の中でも、昔家にいた時のように、わざと明るく振舞っていた。

いつの日か、誰にも自分の弱みを告げられない事が、私の「弱み」となっていった。誰一人として相談する相手が居なかった私は、気付いたら学校へ行けなくなっていた。家に帰りたいと一人部屋の中で泣く事が増えた。一人の時間が増えれば増えるほど、私の今までの不安や悲しみまでもが込み上げてきた。食欲も減り、私は鬱状態になった。そんなある日、私は急に酷い吐き気と腹痛に襲われた。一晩中トイレにこもり吐き続け、朝になったら意識が朦朧としていた。その後病院へ運ばれた後私は直ちに点滴を打たれた。夕方、やっと意識が正常に戻った頃、「吐き気と腹痛の原因は不明だ」と看護師に言われた。精神的理由かもしれないから、学校のカウンセラーと良く話すようにと告げられた後、私は学校へと戻った。

その日から、私はカウンセラーの先生と週三回会う事になった。彼女は、白人の女性で私と人種は違ったが、日本人の私にとっても優しく接してくれた。人種が違くと、文化も考え方も異なるが、感性だけは同じであった。私は少しずつ、自分が今まで抱えていた問題を先生に打ち明けられるようになった。今まで周囲のだれにも言えなかった事を、誰か一人にでもさらけ出す事が、これほど気持ちを楽しませるものだと私は知らなかった。時が経つにつれ、私は前向きに学校へ行けるようになった。何か困ったことがあったら、誰かに相談出来るようになった。自分の本当の弱みを伝えられる相手が出来た時、私は初めて自分の弱みと向

プリンストン日本語学校新聞



平成24年度 No.32号

平成24年1月13日

文責 長尾重範

き合えたのだと思う。向き合えたからこそ、「あの頃の自分」から抜け出す事が出来て、今の私に辿りつけたのだ。

現在私は、自分の「弱み」と「強み」、両方を生かし、学校の寮長の一人として生徒達の悩みを積極的に聞く相手となっている。社交的で、聞き上手なせいか、沢山の生徒が私に悩みを打ち明けられるようになった。自分自身が昔同じ境遇に居たからこそ、相手の気持ちを痛いほど共感出来るし、適切な対応をとる事が出来る。実際に、自分の体験談を伝えることで、何人もの生徒が元気になってくれた。人から相談され、解決に導くまでの間は簡単な事ではないし、時間もかかるが、とてもやりがいのある役目だと私は思っている。私に相談することで、一人でも辛い思いを抱えている生徒が減って欲しいのだ。どんなに些細なことでも、真剣に私の話を聞いてくれたカウンセラーの先生のように、私も引き続き、人の悩みを聞いてあげられるような人になりたい。

私の弱みは、自分を追い込み、悩み事を打ち明けられない事であったが、そのおかげで今、大切な事に気付く事が出来た。「弱みをさらけ出す事は恥じる事ではなく、自分と向き合う事である」と。この教訓を私に教えたあの辛かった日々も、今ではかけがえのない宝物だ。弱みは、強みの一部である。私は「弱み」があってこそ、初めて「強み」が得られたのだ。

東和エッセイコンテスト最優秀作品（著作権者のフィラデルフィア日本人会の許可を得て掲載しています）